

「キリストの弟子の条件と約束 裏切りの過越し①」

ルカ21:21-37 ルカ22:7

■ ずれた目線

アメリカでピッキングの天才である脱獄囚がある日脱獄を試みました。彼は鍵穴にピンを何度も差し入れますが全く開きませんでした。なぜ開かなかったのでしょうか。実は扉には元々鍵がかかっていなかったのです。彼は真剣に鍵のかかっていない扉から脱獄しようとしていたのです。私たちの目線は実はずれていることが多いのです。いくら努力をしているつもりでも実はずれていることはないでしょうか。

今年は変貌と變遷がテーマです。私たちが本来の目的と役割に立っていないければ意味はありません。ですからズレに気づき本来の姿にもどって神さまの作ってくださった姿に変貌を遂げていきたいのです。たしかに変わろうとするといろいろなチャレンジがやってきます。しかし、私たちがそのズレに気づき神様に向かって目を上げるなら神様からの答えがあります。そして一遍に変わっていくのではなくその身丈にまで成長して變遷していき、すぐに折れてしまうような枝から咲き誇る桜の花のように神様が与えてくださる命のすばらしさを受け取りたいのです。

■ 神の計画と人の企み

イエスがエルサレムに入場した時に民衆たちはホザナと言って喜んで向かい入れました。宮をはじめいろんな場所で教えを説くイエスの姿は次第に民衆の心を引き付けていきました。律法のリーダーだったパリサイ人はこれ以上イエスへの関心が高まる前にイエスを殺す計画を相談し始めました。知恵者と呼ばれる多くのリーダーたち、パリサイ人、サドカイの人たち、祭司長などには派閥がありました。しかし、このイエスの暗殺計画だけは一致したのです。憎しみや嫉妬という間違った頑なな心が合わさり暗殺計画は着々と進んでいったのです。そこには間違いを知っているながら赦しがない世の中で生きていくしかなかった背景があるのかもしれませんが。ルカによるこの描写を通して神様は私たちに何を残そうとされたのでしょうか。

■ 尊い対価

ユダは計画していたイエス様の姿が自分の思いとは違っていたことに腹が立っていました。ユダに悪が入ったとありますが私たちの動機の中に悪は小さなズレとして少しずつ浸透していくのです。ナルドの香油の場面で間違った決断をしたユダはカヤパの祭司長のもとに行きました。庶民であるユダが総理大臣官邸に行くようなものでとても大胆な行動です。しかしカヤパは喜んで奴隷の対価として銀貨 30 枚を投げ渡したのです。過ぎ越しの祭りのために暴動を監視するために来ていたヘロデ、またピラトを使ってイエスをうまく捕まえようと企みました。彼らの計画は過ぎ越しが済んで人々が移動する時にイエスを捕らえることでした。しかし、過ぎ越しの日にイエスは十字架に架けられねばならないというイザヤの預言によってこのことは決まっていたのです。私たちのなかにある弱さは神の計画をずらすとします。ユダは後悔し銀貨を返しに行きまじがしかしそれは受け取られることなく、社会の中で一番底辺の仕事だった陶器師の土地をこれで奪い買いそこは異邦人の墓地となりました。イエスの十字架の贖いは異邦人のものだったのです。神はこの銀貨 30 枚の代価を尊い代価だと言われました。過ぎ越しの祭りが行われ、一時の欲や利益や痛みから逃れるために自分の計画が成し遂げられたユダはこのあと自らを滅ぼすことになりました。赦せない心、受け止められない心、神様の声ではない違うことをしたいと思う心に危険は入り込んできます。神様は悪魔の策略を通してユダに悔い改める機会を与えることをされました。

神様はどちらを選ぶのかと聞かれています。神の計画は必ずなされますがそれに背く行為をし続ける私たちは神様の前に悔い改めたいのです。

■ キリストの贖い

群衆がいなくてではなく群衆がいる中でイエス様は引き渡され十字架に貼り付けられました。キリストの贖いとは過ぎ越しの時に罪の犠牲がなされ、完全に終わることが必要でした。ですから、この日でなければならなかったのです。サタンがしようとした計画は十字架ではなく暗殺でした。しかし旧約の約束どおりイエスは十字架に架けられました。申命記には木につるされたものは神に呪われたものとありますが、すべての呪

いをも引き受けたイエス様の姿がここにあるのです。罪のない人が木に架けられたからこそ私たちの贖いを行ったということがわかるのです。石打ちでも暗殺でもなかった理由です。ルカが私たちに教えようとした摂理はこのようなものです。

「そこで、子たちはみな血と肉とを持っているので、主もまた同じように、これらのものをお持ちになりました。これは、その死によって、悪魔という、死の力を持つ者を滅ぼし、一生涯死の恐怖につながれて奴隷となっていた人々を解放してくださるためでした。」ヘブル 2:14～15

世の中には敗者復活がないかもしれませんが赦し合い愛し合う私たちにはあります。私たちの中に喜びはあるでしょうか。その喜びは自分の思った計画ではなく神の計画が成し遂げられたときの喜びでしょうか。私たちは神が言われる本当の喜びに立つて歩み始めた時にその周りから奇跡が起こり始めるのです。

■ 医師 中村伸一

中村氏は大学では優秀だと言われ続けていました。研修医時代に診たある女性患者に対して自分の判断を信じ適切な治療をして家にかえしました。しかし実は脳梗塞だった彼女は緊急に搬送されることとなってしまったのです。自らの所見の甘さを認めて謝る彼を、人は誰でも失敗をすると患者の家族は赦したのです。名医になることを信じて疑わなかった彼の心は悔い改めと神への祈りによって変えられたのです。現在、自宅で最期を迎えるのは通常 3 割といわれる中で、彼が従事する地域は 3000 人という小さな地域でありながらケア体制が整っており 5 割を超えた人が在宅で最期を迎えているのです。神は失敗をするなどとは言っていません。失敗をしたときにどうするかを教えているのです。

さいごに

「彼はさげすまれ、人々からのけ者にされ、悲しみの人で病を知っていた。人が顔をそむけるほどさげすまれ、私たちも彼を尊ばなかった。まことに、彼は私たちの病を負い、私たちの痛みをになった。だが、私たちは思った。彼は罰せられ、神に打たれ、苦しめられたのだと。しかし、彼は、私たちのそむきの罪のために刺し通され、私たちの咎のために砕かれた。彼への懲らしめが私たちに平安をもたらし、彼の打ち傷によって、私たちはいやされた。私たちはみな、羊のようにさまよい、おのおの、自分かつてな道に向かって行った。しかし、【主】は、私たちのすべての咎を彼に負わせた。(イザ 53:3～6)」

私たちはイエスキリストの十字架で贖われたことを知っています。正しいことがなにか、どうするべきかを知っています。そしてまた、悪魔に誘惑されてはならないこと、間違った道に進んではいけないことも知っています。「神のみこころは何か、すなわち、何が良いことで、神に受け入れられ、完全であるのかをわきまえ知るために、心の一新によって自分を変えなさい。(ロマ 12:2)」神様は私たちに相手を変えるのではなく自分を変えなさいと言われました。人に向いている目があるなら、人に向いて裁く思いがあるなら立ち返る心を与えてくださいと神様に祈りましょう。神様のもとに戻り喜び溢れる人生となりますように。

(要約者:西崎 真由美)

(2024年3月17日)